

いつれの御おほんとき時ときにか、女御にようご、更衣かついあまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際きは

【語注】

にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

はじめより「我は。」と思ひ上がりたまへる御方々、めざましきものにおとしめ嫉そねみ

たまふ。同じほど、それより下臈げちふの更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつ

けても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いと篤あつしくなりゆき、

もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりを

もえ憚はばからせたまはず、世の例ためしにもなりぬべき御もてなしなり。

上達部かんだちめ、上人うへびとなども、あいなく目を側そばめつつ、「いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土もろこし

にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れ、悪しかりけれ」と、やうやう天あめの下にもあ

ぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃やうきひの例ためしも引き出でつべくなりゆくに、い

とはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心みこころばへのたくひなきを頼みにてまじらひた

まふ。

【中略】

さきの世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子おのこみこさへ生まれたまひぬ。

いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、珍めづらかなる稚児ちごの御容貌かたち

なり。

一の皇子みこは、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲まごけの君と、世にもてか

しづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのや

むごとなき御思ひにて、この君をば、私わたくし物ものに思おもほしかしづきたまふこと限りなし。